



## JAPANESE TEA CEREMONY OPEN DAY

◇ イギリス便り ◇

### 立教英国学院の子どもたち

その2

小野 英子

約一か月半の夏休みが終わり子ども達が帰って来た。一か月半の不在というのは、普段就寝まで見ている生活を考えると長いもので、特に成長期にある子ども達は休みを終えて、多かれ少なかれ成長して戻って来る。彼らの夏休みを知る唯一の手がかりは「日記」であり、全てではないにしろ、どんな毎日を過ごしたのかを知ることが出来る。私が今受け持っているのは五年生五人のクラスだが、当然のこと勿ら五人五様の日記を、そしてそこからわかる生活、それ以上のものを楽しめる。大体、休みになると長く、きちんとした日記を書くこどもがいるが、その背後関係を考えてと失笑してしま

うのだが。

五人の内男の子四人は、イギリス在住で、立教に来る前には少なくとも一年以上、現地校に通っており夏休みはその頃の友人達と会う機会でもあるようだ。

八月五日

今日は又、午前中昨日と同じことをして十一時になったら弟の現地校の友だちが来たのでいっしょに遊んだ。名前はAnthonyといって僕が現地校のときもよく遊んだ。まず外でバドミントンをしてからしばらくしてBelmontの公園に行った。そこには坂があったので思いつきスケボーに乗った。サッカーをしたり、おにごっこをしたあと家で水風呂に入った。気持ち良かった。

元氣いっぱい遊んでいる様子が伺える。一つ気づくのは英語を縦書きにしてしまうことである。英単語などよく知っていてスラスラと綴るのだが、縦書きにさせたと

き、本来横書きのままであるはずの英語もついでに縦書きになってしまふことがある。私はここに来るまでこのような書き方を目にしたことがなかったが、この子どもだけでなく、他の子ども達も縦書きになってしまふことがある。日本の小学生だと、英語をそのまま文に登場させることは少ないであろうし、中学生だと、英語は横書きのものとして教えられ、縦に書こうとは思いつかないであろうと考えられる。

従ってこの子ども達は英語から日本語への切りかえのとき、このような自己流を発見したのではないだろうか。

七月十二日

今日、久しぶりに現地校の友達の家遊びに行きました。キックストーンというゲームをして遊びました。このゲームはかくれんぼと同じようなルールでオニを中心にして二十メートルくらい離れた所まで逃げられる遊びです。ぼくはすぐみつかってしまふけど

他の人を見つけるのはおそいのでしょっちゅうオニになっていました。三年生くらいの子を相手に必死になつて遊びましたが、とてもかかいませんでした。

キックストーンというくらいだから石も蹴るのだからかくれんぼうのような遊びらしい。日本にもイギリスにも同じような遊びがあることから、遊びとは元来、本質的なものであると改めて感ずる。

七月十九日

今日は友達のマイコーの家でビデオを見ました。マイコーは今、右足をねんざしているので、家の中でしか遊べません。一人じゃさびしいのでぼくを呼んだそうです。そのビデオはともこわくて、まだ明るい時間でもぶるぶるふるえてきました。

マイコーという友達の名前が彼の日記にはよく出てくるので、当然仲良しであろうが、立教にいる間はほとん

ど日本語しか話さない彼らがイギリス人の友人達とどんなふうにコミュニケーションをとるのか、私には想像するしかないけれども、非常に興味深い。

マイコーという名前はきつとマイケルとした方が私達には馴染みやすいはずである。この子どもの場合、いかに耳から入ったものをカタカナにしたように見受けられる。同様に彼は、英語を全てまず耳から自分の中にとりこんでいるであろうと察する。それは、我々が日本の教育の下で習う英語とは全く違う学び方である。文法より何より、日々の生活の中で友達との対話等から必要とされるものを学びとっていくのであろう。外国に行くにすると、まだ、観念などが固定されていない時分に聴覚、視覚の触手を伸ばして新しい環境に臨むと、新しく触れたものが、柔かい素地の中にとりこまれる。英語が音として入り、それが言葉となる。言葉とはもともと音から始まり、それが文字へと進んできたものであろうから、この子ども達の学び方は自然にそうだったとはい

え、本来の流れに沿っている。自然だからこそ適応へとつながるのであろう。

男の子四人がイギリスに任んでいるのに対し、女の子一名はアルジェリアから来ている。

我が校の子どもの多くはイギリス、ヨーロッパ圏から来ているが、中東、アフリカなど第三世界に親が駐在している子ども達もいる。とかくこのような国々は、日本から行った人々が生活するには、なかなか物資が手に入らなかったり、生活環境もままならなかったりと大変であると聞く。ヨーロッパ圏でも社会主義国は同様であるらしい。そのような事情からか、アルジェから来ていることを恥ずかしかることがあるのだが、それはおかしなことである。子ども達の間には冗談にしる何にしる、来ている国を理由にからかったりすることがあるが、表面的にしか捉えていないことがよくわかる。そういう国から来ている子どもたちをからかうことにより、間接的にはその国をその子達の尺度で劣っていると見なしてい

る。任んでいる国によって優越感、劣等感を持つことは全くのはき違えて、そのようなものを大人になるまで持ち続けられたら更に困る。国際感覚どころではない。折角、このような環境におり、いろんな国を知る機会を与えられているのだから、表面的なものを超えて、もっと理解を深めていってほしいと思うのである。

七月二十八日(木)

今日は、お天気もいいで父が丘の上に行って写真を撮らないかと言ったので、海が見えて眺めのいい所へドライブにいきました。そこからアルジェで一等のホテルなども見え、またアルジェ港には大きな船が十五艘ありました。それから、アルジェの住宅街カスバという所の中へ入ってみました。中は細い道でめいるようになっており、洗濯の仕方などひどいものでした。社会主義だとこんなふうになってしまおうのでしょうか。

更に彼女は、こういう所を歩いていると、ジャポネ、ジャポネと声をかけられ、石を投げられることもあるとも言っている。住んでいるとその国のいろんな部分が見えてくる。

アルジェリアの人々がどんな暮らしをしているのか、どうして社会主義国なのか、どうしてフランス語が通じるのか、独立記念塔はどうしてあるのか、を彼女は知っている。物資が手に入りにくいながらも、女中が日記に出て来たりして、アルジェリアでは良い暮らしをしているようだが、機会を有効に用いて知識を理解へとつなげられるようにと期待している。

長い夏休みは、また家族との旅行も楽しみの一つであるようだ。

七月十三日(休)

今日はウィーン郊外にあるシェーンブルン宮殿にま  
ず行ききました。このお城はマリア・テレジアが夏の別

荘として使っていたそうです。マリー・アントワネットがここに住んでいたかと思うと、とても興味が湧いてきます。そのあと中央墓地に行き、ベートーベン、シューベルト、ヨハン・シュトラウスなどのお墓を見ました。いかにも音楽家の墓といった感じでした。午後はケルトナード通りでショッピングをしたり、王の納骨堂を見学して夕方はブラッターという遊園地へ行き映画「第三の男」で有名な大観覧車などにも乗りました。夜はウィーン最古のレストラン「グリーンヒェンバイズル」でウィーン料理を楽しみました。

この子どもの日記を見ると、オーストリア、ハンガリー、チェコスロバキアを旅行し、ウィーンの華やかさと東欧の雰囲気味わってきたようなのだが、他の子どもたちもスイスに行ったり、スペインのマヨルカ島へ行ったり、また日本に一時帰国したりと、各々の夏を楽しんでいる。日本から見るとヨーロッパを遠く感ずるが、ヨーロッパにいとヨーロッパ諸国は実に近く、日本はま

々に Far East というのがよくわかる。だから、こちらにいとヨーロッパの国々を気軽に訪れることができるし、その地の利を活かして、子ども達は実地で地理の勉強をしているようなものであり、外国が身近なものとなる。このような機会に恵まれて幸運である。

このような夏休みを終えて生徒達が戻ってきてから、一か月以上が過ぎた。どの学期もそうなのだが、初めの一週間はたまらなく長かった。それさえ過ぎれば早いテンポで流れて行くのだが、まだベースがわからない為であろうか長く感じる。特に今学期入って来た新生には特にそうであったろうと推し量られる。しかし、十五名の新生達も既にかなりうちとけた。ここにいる子どもたちにとって新生は決して「奇」なるものではない。

毎学期、何名もの新生生が加わり、又何人かの生徒が去って行くこの学校では、これらは変化であれこそすれ、すぐに日常に溶けこんでしまうものなのである。親

の仕事上、突然帰国が決まることもある。高二、高三の場合は子どもだけ残って卒業を待つが、そうでなければ、年度が途中であっても学期終了を待つて親と共に日本へ帰る場合が多い。二学期の終わりには高三全員が受



験の為日本へ帰る。学期毎に別れがある。変動の多い学校だどつくづく思う。それ故に子どもたちは変化に慣れているともいえる。だから新入生にとっては溶けこむのにそれ程時間を要しない雰囲気というものがある。しかし、同時に別れにも慣れていくような気がする。決してそれは別れを悲しまないというような意味ではない。当事者達にとっては、別れの常であるように非常にせつないものであるが、不在に馴染むのは、又、これとは別問題であるということなのである。ここでの生活を営むにあたって、子ども達が自然に身につけた方法なのかもしれないが、上手に作用しているように思えるのである。

現在は、約一週間後に控えた文化祭（Open Day）の為、全校を挙げて（とはいえ、高三は除く）準備に大わらわである。クラス毎に展示や劇をするクラス企画では、小学生は「奈良の大仏」を取り上げ、今は二十分の一の模型作りに奮闘中である。展示説明は全て英語で模

造紙に書かれ、準備は夏休み前から始められた。生徒父兄もさることながら、地域の人々にみてもらうことを意識しての計らいである。先日は近くの街に、小学生がピラ配りに行った。確かに、地域の人々に、立教英国学院を、更には日本を知ってもらうよい機会である。その為に、学校としても非常に組織だった準備が行われている。

十月二十三日に夏時間から冬時間へと変わったので、日の暮れる時間がぐっと早くなり日毎に寒さも増して来ているが、生徒は準備に余念がない。

（立教英国学院）

